

〔研究ノート〕

スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの思想（2）

——「ユートピアの声」シリーズを読む——

土 居 充 夫

第2部. アレクシエーヴィチの思想

1. アレクシエーヴィチの自由論

アレクシエーヴィチにとって、最も重要な価値は自由であろう。例えば、東京外大での講演（2016.11）を彼女は「これまでいちばん深く考えてきたことは何かと聞かれたら、私は、自由だと答えるでしょう」（B-1：p 308）という言葉で始めた。そして、講演を次のように締めくくっている。「いちばん大事な問いに答えを見つけることはとうとうできませんでした。その問いとは、なぜ私たちの苦しみを自由に変えることができなかったのかということです。私は時代のあとを追っていきます。人間のあとを」（B-1：p 329）。別の場では、「1990年代に訪れたせっきくのチャンスを私たちは逃してしまいました。どういう国にするべきか、強い国なのか、それともまともな暮らしのできる立派な国なのか。この問いに対する答えとして私たちは前者の『強い国』を選んでしまったのです、…『希望の時代』は『恐怖の時代』に取って代われ、時が逆行してしまいました」（B-1：p 21）と言っている。要するに、アレクシエーヴィチは、ソ連崩壊後の自由になれるチャンスを逃したことを無念に思い、その過程と原因を（後述の方法で）追って行こうというのである。

ところで、自由は多義的な用語であり、論者によって意味するところが異なる。アレクシエーヴィチにとって、自由は何を意味しているのであろうか？

①自由とは自立した倫理的選択である

自由は、自らの意志で善と悪を知ろうとし、苦しいながらも善を選ぶ倫理的選択を意味する。「ドストエフスキーの『大審問官の伝説』のなかに自由についての論争がある。自由の道は困難で、苦難にみち、悲劇的だということについての……。『これがあんなに高くつくものなら、なんのためにろくでもない善と悪というものを自分から知ろうとしなければならないのか』。人はつねに選択しなければならない。自由か、それとも、安穩で整った生活か。苦悩を伴った自由か、それとも、自由のない幸福かを。そして、大部分の人が二番目の道を歩むのだ」（A-5：p 9f.）。

言わずもがなであるが、この倫理的選択は、『カラマーゾフの兄弟』の中で、次兄のイ

ワンが三男のアリョーシャに話して聞かせる自作の物語詩『大審問官』のテーマである。大審問官がキリストとおぼしき男に対して語る言葉をいくつか引用しておこう。「人間は…、何が善で何が悪かは、自分の自由な心によって自分なりに判断していかななくてはならなかった」(B-2: p 274)「人間にとっては、善悪を自由に認識できることより、安らぎや、むしろ死のほうが、大事だ…。人間にとって、良心の自由にまさる魅力的なものはないが、しかしこれほど苦しいものもまたない」(B-2: p 273)「はたして人間の本性が、…このうえなく恐ろしく根本的で苦しい精神の問題にぶつかった瞬間にも、ただ心の命じるままに自由な決断ができるように創られているのか？」(B-2: p 276)。

大審問官の言葉は抽象的であるが、具体的なケースを想像することは決して困難ではない。この物語詩の前にイワンが憤慨を込めて話している児童虐待を例に取れば、児童虐待を何も考えず慣習として受け入れるのではなく、考えて悪と認識し、それを止める、あるいは社会的な廃止に向けて努力する、そのように行動して初めて人間は自由になれるのである。アレクシエーヴィチは、自由を選び、『亜鉛の少年たち』の上演に関して、次のように語っている。「なぜ、私たちはこんな生き方をしているのか。なぜ、権力者のこんな態度を許したままにいるのか。問われているのは皆に突きつけられた選択の問題です。『行くのか行かないのか』『撃つのか撃たないのか』『沈黙するかしないか』——。それが一人一人に問われているのだと思います」(B-1: p 136)。

i. 自由は形式合理性の対極に位置する

「[あるアフガン帰還兵は] 決して自分の罪を認めようとしなかった。自分は忠実に任務を果たしているだけだ、責任は自分以外の誰かがとる、ということに慣れてしまっていたんです。『小さな人々』は時々そうして自分の良心を隠す逃げ場を得ようとする。自分の良心から隠れるか、他の人に自分の良心の問題を押しつけてしまおうとするのです」(B-1: p 247f.)。自分に与えられた指示命令を、予想されるその道徳的結果を考慮することなく、忠実に実行するべきであるという考え方が形式合理性であるが、自由はその対極に位置する。典型的には兵士の場合、命令に従って戦地に「行くのか行かないのか」、戦場で「撃つのか撃たないのか」選択をしなければならないのである。

ii. 傍観は悪の選択である（あるいは、傍観者は悪への共犯者である）

他方、戦地に行かない者は倫理的選択をせまられない、というわけではない。「私たちはみな、起ったことをともに経験したわけですが、その犠牲者でもあり、同時に迫害者でもあるということです。…起ったことに一緒に参加していたのだから責任がある、自分だけ部外者のように知らんぷりをしているわけにはいかない、黙ってはいけないということです」(B-1: p 354f.)。あるいは、「テレビをつけると、たとえばチェチェン戦争のルポルタージュをやっている。あるいはユーゴ空爆のとき、戦争がまるでゲームのように放送されている。…こういうものを淡々と見て、それから何事もなかったかのようにお茶を飲んだり、本を読んだりする。…そうしているときにも、あちらでは子供の手や足がもぎとられ、眼がつぶされている。今日、私たちみんなが犠牲者の側にいるというより、加害者になっていると感じないわけにはいきません」(B-1: p 246)。沼野の解釈に従えば、

「だれしも生きている以上は、少なくともその時代の証人だが、ただの傍観者では『悪』に加担してしまうことになる。積極的に時代や社会に関わっていかなければ自由な人間にはなれない、ということであろう」(B-1: p 355)。

②自由であるためには「戦争文化」「戦争の神話」からの解放が必要である

「戦争文化」「戦争の神話」に囚われて思考停止状態であると、自立した倫理的選択はできない。従って、自由であるためには、それらからの解放が必要である。「私たちにつきまとっていた国家のための正義の戦争という神話。私たちはそんな神話の催眠術にかかっていました。…[アフガンで戦争の実態を見て] 私にとって戦争とは、凶悪な殺人以外の何物でもなくなりました。戦争の神話の呪縛を解かれ、私は本当に自由な人間となって戻ってくることができました」(B-1: p 110)あるいは、「神話の麻酔は恐ろしいものです。政治家だけではありません。『小さき人々』も神話というものが好きなのです。『小さき人々』は、誰よりもこの神話というものに苦しめられているにもかかわらず、この神話と別れるのがとてもつらいのです。母親が息子を戦争に送り出すということは、戦争文化の人質として息子を差し出すということではないでしょうか。…勇気をもってこの真実を認めない限り、私たちの子供は際限なく殺され続けてしまいます」(B-1: p 134)。

i. 「戦争文化」「戦争の神話」の強固さ・根深さ

アレクシエーヴィチは、殺人事件を起こしたある帰還兵とその母親のことをとりわけ気にかけている。この帰還兵ワレンチナは仲間たちと一緒に居酒屋で飲んでいた。そこで自称「アフガン帰還兵」と知り合い、楽しく飲んでいたのだが、どうも辻褄が合わない。母親ニーナによれば、「問い詰めると、実は嘘だった。アフガニスタンの戦場に行ったというのは嘘で、いろんな国に外国出張を重ねて外貨を稼ぎ、女性を買うのが趣味の人だったと。300人の女性の名前が彼の手帳にあったそうです。仲間の話では、それがわかった途端、あの子が酒場からいなくなったと」(B-1: p 115)。ワレンチナは「家に戻って…料理用の肉切り斧を持ち出し」その男を殺して、15年の懲役刑を受けた。ニーナは「私は自らあの子を戦地に送り込んだんです。先延ばしにすることもできたのに。遅くなってほしかった。軍隊に入ればもっと立派になる、強くなるんだって、自分にもあの子にも言い聞かせてた」(A-3: p 5)という自責の念があり、面会に通い続けたが、ワレンチナの出所後も母子関係が修復することはなかった。ワレンチナはある教団に入信し、結婚もしたが、「その後、隣人の話では、…再び傷害事件を起こし、収監された」(B-1: p 122)。ニーナは疲れ切って精神病院に入院した。出所後のワレンチナと話をしたアレクシエーヴィチは、次のように総括している。「彼の話しぶりから、私は、彼が自分に植え付けられた神話をどこかで愛していると思いました。単に国家や戦争の奴隷ではなく、奴隷であることにロマンを感じているような感覚です。彼はいまだにそこから脱け出すことができません。これが、私たちが育ってきた戦争文化なのです。……思うのは、国家や戦争という魔法を前にしたときの人間の無力さです。ニーナさんは、この魔法と闘いながら、そして自分の息子を理解しようと努めながら、敗れてしまいました」(B-1: p 123f.)。

ii. 「戦争文化」「戦争の神話」からの解放の含意

ソ連人にとって、十月革命後の革命・祖国を守る戦争であれ、ナチスドイツ（など同盟国）の侵略から祖国を守る「大祖国戦争」であれ、戦争は正義の戦争である。そこでは、侵略戦争は存在しえない。アフガン戦争は侵略戦争ではないし、1939年の独ソ不可侵条約の秘密議定書に基づきソ連が行ったポーランド、バルト三国、フィンランド等への侵略戦争は存在しない。例えば、次のような証言がある。「父はフィンランド戦争…に行っていた。なんのために戦うのか、父は最後まで理解できなかったのですが、行かねばならなかった、…この戦争のことは伏せられていて、戦争ではなく、フィンランド出兵と呼ばれていたんです」（A-5：p 48）。「戦争文化」からの解放は、こうした不都合な歴史的真相に向き合うことをも意味するだろう。

ちなみに、フィンランド戦争を「フィンランド出兵」と呼んでいたとの証言には興味をそえられる。なぜなら、それ以降も今日に至るまで、言葉の言い換えが続けられているからである。アフガン戦争では、「恥ずべき侵攻の真の規模とその意味を故意に隠蔽しようと、あの戦争をけしかけた人々は『限定派遣』という用語を公式に用いてきました」（A-3：p 380）。チェチェン戦争に関する証言では、「チェチェンでは15年間戦争していて、彼らはこっちに逃れてきている。じわじわとロシアじゅうに…。おかしい戦争だわ、ロシアが彼らと戦争しているのに…『特殊作戦』…。これって、いったいどんな戦争なの？」（A-5：p 536）。そして、現在進行形のウクライナ戦争をプーチンは「特別軍事作戦」と呼んだ。

このような言い換えには、国民に課される犠牲の大きさを実際より小さく見せる機能があるのかもしれない。しかし、「戦争文化」は、祖国のためにわが身を犠牲にすることを当然と見なしているのであるから、払うべき犠牲を小さく見せる機能が重要とは思えない。大祖国戦争のように、政治指導者が公然と国民に献身を求めることができない＝正当性に欠ける戦争だから言い換えている、と考えられる。「戦争文化」からの解放は、こうした言葉の言い換えの背後にある真相を見抜くことを意味するだろう。

③自由は「抵抗の文化」と密接に関係している

論理的に考えて、個人レベルの自由は、社会レベルでの「抵抗の文化」と密接に関係している。すなわち、個人は「抵抗の文化」が存在する程度に応じて自由になりやすいし、逆に、自由な個人が増えれば増えるほど「抵抗の文化」は広がり、強固になる。

アレクシエーヴィチが「抵抗の文化」の必要性を説くのは、彼女が、（例えばチェルノブイリ原発事故の際顕著に現れた）極めて利己的で国民に非情な「国家の論理」の存在を見て取っているからである。曰く、「国家はどこも同じようなもので、同じような論理で動いている…。国家は人間を欺き、利用しました。そして、国家と役人は自らの救済に走りまわりました。人々を救うのではなく——」（B-1：p 214）。

i. 「抵抗の文化」とは何か

「私の国ベラルーシは全体主義的な国家ですが、人々が団結しようとする、それが何

であろうと国家は激しく反応する。そういう人たちを怯えさせようとし、抵抗しようとする人々の結びつきを断ち切ろうとします」(B-1: p 218f.)。

こう語るアレクシエーヴィチは、福島原発事故後に訪れた日本を評して、同じように「抵抗の文化」がないと言う。「日本にも、私たちのところとおなじく、『抵抗の文化』がないようです。……人々はただ、善き皇帝、善き役人、善き首相が現れるのを待っている。だから闘うことができず、国や首相に一人一人の命の価値を認めさせることもできない」(B-1: p 258)。念のために言えば、福島現地を訪れたアレクシエーヴィチは、抵抗運動をしている人たちがいることを知っている。従って、ただ抵抗運動が存在するだけでは「抵抗の文化」とは言えないのである。「抵抗の文化」と呼べるためには、鎌倉の言うように、個々の抵抗運動が結びつき、面としての広がりを持つことが必要なのである(B-1: p 219f.)。そして、それがベラルーシにも日本にも(もちろんソ連・ロシアにも)欠けている、というのである。

ii. 「抵抗の文化」の欠如の原因——「お上意識」

a. ソヴィエト文化——民衆にしみ込んだ恐怖

なぜ欠けているかと言えば、長年に渡って培われた「お上意識」が原因の第一に挙げられるだろう。

「ユートピアの声」シリーズには、密告や収容所に関する証言が出てくる。例えば、「37年に割当があったように…人民の敵を暴露し根絶するための割当命令書があったように…80年代には地区委員会や州委員会に名誉回復の数字が上からおりてきていました。割当は遂行しなければならない、それ以上に。スターリンのやり方です。……一方では、システムが人間をずたずたにしていたし、他方では、人びとは思いやりの心を欠いていた。密告する気まんまんだったのです」(A-5: p 79)。「おじの前で取調官が…屈強な男が…ひとりの男の頭を用便桶につっこみ、溺死するまでずっと押さえつけていた。ワーニャおじさんは…裸で天井につりさげられ、鼻や口、人間にある穴という穴に、アンモニア水を流しこまれた。取調官はおじの耳に小便をし、どなった『てめえ、利口者を思いだしやがれ、利口者の名前をいえ』。それで、ワーニャおじさんはいわれた通りに思いだした…。すべてに署名した」(A-5: p 350f.)。

いつ、どんな理由で、誰から密告されるかわからない。そして、取調べの過程で拷問を受け、「自白」を余儀なくされ、死の強制労働収容所へ送られる。このような、共産党のトップを頂点とする巨大な官僚制システムによって植えつけられた恐怖心によって、民衆は自由になれない。アレクシエーヴィチによれば、「この恐怖はきわめて手の込んだもので、いつもどこかに潜んでいて、やすやすと姿を現します。心に恐怖しかない人間は、恐怖の独裁を受け入れる用意があります。私は今、古い恐怖のメカニズムが再び動き出して、またぞろ『小さき人々』を生贄にしようとしているのを見ている気がします。恐怖に囚われた人は、自由をかちとる力がありません」(B-1: p 66)。

b. ロシア文化——(第1部4②iiを参照のこと。)

民衆が自由になれないのは、ソ連体制の産物というだけでなく、もっと古い歴史的・文

化的要因によるのかもしれない。アレクシエーヴィチによれば、「お決まりのロシア正教、民族主義。こうした諸問題は、私たちの抱える深い文化的諸問題と関係があるのかもしれませんが。ロシアでは長きにわたりタタールの軛〔1240-1480年〕の下にあり、農奴制が廃止〔1861年〕されるのも遅かった」のである（B-1：p 267）。

iii. 新しい戦争——テクノロジーと人間の戦争

ただ、原発事故あるいは広くテクノロジーとの関係で考えると、別の要因が付け加わる。アレクシエーヴィチによれば、「チェルノブイリと福島と呼ばれる巨大な事故はまだ2度しか起きていません。ですから、それにどう抵抗すればいいのか私たちには経験がありません。ひとつには、出来事そのものに対してどう抵抗したらいいのか、もうひとつには、起きたことの責任を国家に負わせるためどう闘ったらいいのか、その経験がないのです」（B-1：p 259）。これは、「まったく新しい姿をした『戦争』…、テクノロジーと人間の『戦争』」（B-1：p 259）であって、人間が作ったものでありながら、人間がコントロールできなくなったテクノロジーによって起こされる戦争である。従って、「抵抗の文化」の前提として、人はテクノロジーを科学的に理解し、社会システム上の位置を理解して、そして倫理的判断をしなくてはならないのである。

「人間がテクノロジーを発明してもそれをコントロールできない時代にいるのだ、これから先に進めば進むほど人間はますますコントロールできない技術を思いつくだろう」（B-1：p 260）と考えるアレクシエーヴィチが一種のエコロジズムを支持するのは自然に思われる。彼女曰く、「人間は哲学を変えるべきなのだ…。人間はひたすら蓄積することをやめ、生きていくのに必要な分だけを自然から得る、おそらくミニマリズムの哲学に道を切り換えなければならない」（B-1：p 263）。

④女の方が「戦争文化」から自由である——女性への期待

自由になるのは、まずは女性からかもしれない。なぜなら、女性の方が「戦争文化」から自由だからである。「ジャーナリストとして各地に取材に行ったとき、私はよく女性軍人に会ったのですが、彼女たちは、どちらか一方が英雄的に相手方を殺して勝ったとか負けたとか、どんな兵器があってどういう将軍がいたなどというお馴染みの話はまったくしないか、あるいはほとんどしませんでした。男は戦争文化の虜ですが、女は自由です。女の話は、話し方も内容も違います。色彩も、空間も、照明の当て方も違うのです。自分の言葉があるのです。そこには英雄もいなければ、官僚的な偉業もなく、いるのは人間らしい仕事をした人か人間らしくない仕事をした人だけ。そして、人間だけでなく、鳥も、木々も、命あるものがみな苦しんでいます。言葉を発することなく苦しんでいるので、よりいっそう恐ろしいのです。女にとっては、公平な戦争であろうが、不公平な戦争であろうが、どれも同じく人殺しです。女は命を産みだすのに、人殺しを強いられている」（B-1：p 317）。あるいは、「女の戦争。英雄の話ではない。一方の陣営がもうひとつの陣営を英雄的に殺した話でもない。女たちの慟哭が記憶に残っている。『戦闘の後、野原を歩きまわると、みんな倒れているんです…。みんな若くて、とてもハンサムで。倒れて空を睨

んでいる。敵も味方もみんな可哀そう…。この『敵も味方も』というのを聞いて、私は自分の本がどういう本になるかわかった。戦争というのは人殺し以外の何物でもないということ述べる本になるだろう。……女たちがいちばん頻りに話すのは人が消えること、戦争ではあらゆるものがどれほど素早く無に帰してしまうかということだった。人も、人の時間も。そう、17, 18歳で志願して前線に行ったけれど、人を殺したがいなかった。死ぬ覚悟だったのだ。祖国のために死ぬ。そしてスターリンのために死ぬ」(B-1: p 11f)。

『女たちの』戦争にはそれなりの色、臭いがあり、光があり、気持ちが入っていた。そこには英雄もなく信じがたいような手柄もない。人間を越えてしまうようなスケールの事に関わっている人々がいるだけ。そこでは人間たちだけが苦しんでいるのではなく、土も、小鳥たちも、木々も苦しんでいる。地上に生きているもののすべてが、言葉もなく苦しんでいる」(A-1: p 5), 「女性の戦争についての記憶というのは、その気持ちの強さ、痛みの強さにおいても『強度』が高い。『女が語る戦争』は『男の』それよりずっと恐ろしいと言える。男たちは歴史の陰に、事実の陰に、身を隠す。戦争で彼らの関心を惹くのは、行為であり、思想や様々な利害の対立だが、女たちは気持ちに支えられて立ち上がる。女たちは男には見えないものを見出す力がある」(A-1: p 12f)。

この「女性らしさ」が顕著な例として、チェチェン戦争への徴兵拒否活動をした「サンクトペテルブルグ兵士の母の会」がある(B-1: pp 138-154)。あるいは、2020年の大統領選挙に不正があったとして独裁者ルカシェンコの退陣を求めた、ベラルーシの民主化運動は女性が中心であった。沼野によれば、「夫の代わりに大統領に立候補したスヴェトラナ・チハノフスカヤ……を支えたのは、同じく出馬を断念させられた夫を持つヴェロニカ・ツェブカロとフルート奏者・作曲家のマリヤ・コレスニコワで、この3人が選挙運動を先導した」。そして、「『政権移譲調整評議会』が設立され、アレクシエーヴィチもこの評議会の幹部に名を連ねた」(B-1: p 356)のである。

⑤自由とは民主主義である。そして、その実現には長い道のりが必要である。

厳密に言えば、女性はみんな「戦争文化」から自由だというわけではない。「産む性」という側面を強調し、純化して抽出した、いわば理念型としての「女性」が「戦争文化」から自由なのである。実際には、『『亜鉛の少年たち』裁判』の原告たる母親のように「戦争文化」に囚われている女性も大勢いる。従軍経験のある女性でも同様で、時にアレクシエーヴィチは「女性の視点」からの証言を引き出すのに苦労している。「女子供は、偽りの激情やイデオロギーとは縁遠いのです。でも、ときにはイデオロギーがらみのつまらない話を延々と聞かされた後ようやく、相手が私を信頼してくれイデオロギーから解放される、そういう瞬間を待たなければならないこともあります」(B-1: p 341)。

従って、自由の実現には時間がかかると覚悟しなければならない。それでもそれに向けて努力すべきなのである。曰く、『『自由』とは長い道のりのことであり、歩み通さなければならないものである…。…人類には民主主義以外の選択肢はないのだという感覚があります。いつ実現するかわからないながらも、人類共通の世界に向かって歩み続けるので

す」(B-1：p 268)。「自由とは長い道のりだ…。この道には危険と誘惑があちこちで待ち構えています。私たちのところには自由な人間がいません。もっと成長して自由な人間にならなくてはいけないのです」(B-1：p 327)。

2. 愛と人間らしさについて

アレクシエーヴィチの思想において、中心的なキーワードである自由に加えて、愛や人間らしさも重要な位置を占めている。

①愛と倫理的選択の緊張に満ちた関係

まず、倫理的選択という意味での自由と密接に関連する愛がある。大審問官の言葉にも「おまえが望んでいたのは自由な愛であって…」(B-2：p 277)とある。

善と悪の二者択一なら、まだ選択は容易かもしれない。しかし、現実にはむしろ善と善(あるいは悪と悪)からの選択を迫られるのが多いのではないか。アフガン戦争の場合で言えば、それはソ連の侵略戦争なので、戦場でロシア兵がアフガン兵を射殺するのは悪であり、撃たないことが善と言えよう。射殺は撃たれた当人のその後の人生の可能性を完全に奪い、また家族など親しい人を悲嘆にくれさせる。しかし戦場で撃たなければ、こちらが撃たれ自分あるいは同僚兵士が殺されるかもしれない。それが意味することはアフガン兵の場合と同じである。人を愛すること、人の命を大切にすることは、善を選択するために必要だが、愛によって自動的にひとつの善が選択されるわけではないのである。

「戦争文化」から離れた例を取ろう。チェルノブイリ原発事故の消火活動に当たり致死量の4倍もの放射線を浴びた消防士の夫を愛するあまり、文字通り寄り添った妊娠中の妻がいた。『町をはなれろ！でていくんだ！子どもが生まれるんだから』『でていけ、子どもを救え』(A-4：p 3)と夫が頼んだにもかかわらず。『お医者さんにいわれてるだろ？抱きついちゃいけないよ。キスもだめだってば！』(A-4：p 11)と夫にたしなめられたにもかかわらず。彼女は、その後生まれた赤ちゃんを生後4時間で亡くした。

夫は被爆による肉体のすさまじい変化を示しながら2週間で亡くなるのだが、その間の夫の恐怖心と孤独感は想像を絶する。そんな夫に寄り添った妻は、わが身を危険にさらしてまでも夫を支えた勇氣ある人として讃えられるべきなのか、あるいは、生れてくる子の命を軽視した軽率な行為をしたとして非難されるべきなのだろうか？逆に、寄り添わなかった妻たちは、どう倫理的に評価されるのだろうか？そもそも、いずれの場合においても、評価を下せる人などこの世にいないのではないか？アレクシエーヴィチは次のように語っている。「[この消防士の妻は]そばによってキスをしていました。夫の最期までそばをはなれませんでした。そのために彼女がはらった犠牲は、自らの健康とあかちゃんの命。…愛か死か、どうやって選択ができたというのですか。…それに、瀕死の夫や息子に、放射性物体に、付き添わなかった妻や母親をあえて責めるなんて、だれにできますか……」(A-4：p 39)。

②救いとしての愛

アレクシエーヴィチは、徐京植との対話の中で似たような例を挙げているが、結論はやや違っている。先の消防士と同じく大量の放射線を浴びて日々肉体がすさまじく変化していく夫に対し、「自分の愛する者を尊厳をもって死なせてやろう、彼を楽にするのにセックス以外は無力だ」(B-1: p 239)と考えた妻がいた。「あのひとは、夜、わたしを呼んでいた……。その気があったんです。前よりずっと強く愛してくれた……。昼間、あのひとをながめながら信じられませんでした、夜あったことが……。わたしたち、はなれたくなかったんです。愛撫してあげた、撫でてあげた」(A-4: p 380)。

この妻の行為からアレクシエーヴィチが引き出した結論は、次のようであった。「何によって世界は救われるのか？科学に期待したこともあり、言葉を信じたときもあった。いま私たちを救ってくれるのはまさに愛しかない」(B-1: p 239)。あるいは別の文脈では、「私は人間を、愛を信じたいのです。そうでなければ、私たちは何によって救われるのでしょうか。愛のほかに救いをもたらしてくれるものなどありません。愛だけが私たちを救いうる。憎しみは救いとならないでしょう」(B-1: p 273)と語っている。

ちなみに、アレクシエーヴィチによれば、「ロシアでは、…つねに徒刑囚は人々に憐れまれ、救われるもの」(B-1: p 273)らしい。『セカンドハンドの時代』には、終身刑を受けた見知らぬ男のそばで暮らすことを選択した女性の話が載っている。

③人間本性の表出としての愛

厳しい倫理的選択を迫られたり、わが身を危険にさらすような深刻な愛がある一方で、もっと自然な、人間本性の表出としての愛がある。東京外大での講演で、アレクシエーヴィチはある証言を紹介して次のように語っている。『『戦闘が一段落してから私たちは、だれか活着しているかもしれないと思って、生存者を探しながら野原を歩きまわったの。でも、踏み倒された小麦の焼け野原にジャガイモみたいに転がって空を見つめているのは、ドイツ人と味方の遺体。みんな若くてハンサムで、敵も味方もかわいそう』。私の目的は、…人間を集めることでした。『人間の中にどれだけ人間らしさがあるか』というドストエフスキーの問いです。人間に残されたこの人間らしさをどうしたら守れるのか。この問いに対する答えを探しているのです」(B-1: p 312)。敵味方に関係なく亡くなった若い兵士をかわいそうに思う心の基底には、人間の命、人間の生活・人生への慈しみ、換言すれば人間への愛がある。既に紹介した、ドイツ兵に対して救助したり治療したり食料を与えたりする行為も同様である。この人間愛の表出をアレクシエーヴィチは「人間らしさ」として大切に、守ろうとしているのである。

さらに言えば、愛は対人間に限定されない。例えば、チェルノブイリ原発事故で立入禁止区域に残された飼い犬や飼い猫などはすべて処分されることになった。ある猟師は、「子イヌたちは手をペロペロなめて、甘えてくる。じゃれつくんだ。至近距離で撃つはめになった……。…いまでもかわいそうだよ」(A-4: p 140)と話している。アレクシエーヴィチ自身も、「チェルノブイリの大地では人がかわいそうです。しかし、それ以上にか

わいそうなのが動物たち……。…彼ら、動物たち小鳥たちには、なんの罪もない。なのに、ものいわず死んでいった」(A-4: p 35f.)と哀れんでいる。もっと言えば、大地に生きる農民たちにとって、動物に限らず命あるものはすべて愛おしい。避難のため家を去る祖母の様子を孫が次のように証言している。「おばあちゃんは、父に頼んでキビの袋を運びだしてもらって、庭一面にばらまいた。『神さまの小鳥たちに』って。卵をふるいに集めて、中庭にあけた。『うちのネコとイヌに』。サーロも切ってやった。自分のぜんぶの小袋からタネをふるいおとした。ニンジン、カボチャ、キュウリ、タマネギ…いろんな花のタネ…。畑にまいた。『大地で生きておくれ』。そのあとで家におじぎをした…。納屋におじぎをした…。一本一本のリンゴの木のまわりをまわって、おじぎをした…」(A-4: p 360f.)。

3. 「小さき人々」(あるいは「小さな人間」「小さな人」)

アレクシエーヴィチは、自分の文学における「小さき人々」の中心性を認め、それをドストエフスキーから教えられたと語っている。「ドストエフスキーは私を育ててくれた作家なんです。……この世に普遍的一般的な真理などというものは存在せず、人にはそれぞれ個別の真理しかない、と初めて示したのもドストエフスキーだと思います。かれは、貧しく小さいとされてきた人々の心が、歴史的英雄や偉大な聖職者のそれに決して劣っていないことを示しました」(B-1: p 32f.)。「私が20年近く作家として築いてきた文学ジャンルは、『小さき人々』こそ重要なのだ、というドストエフスキーの哲学によって培われたものなのです」(B-1: p 33)。

では、この「小さき人々」とはどんな人たちを指しているのだろうか？(邦訳書においては、「小さき人々」「小さな人間」「小さな人」など複数の表現が使われている。「小さき人々」は複数を意味し、「小さな人間」「小さな人」は主に単数で、複数も意味しうる、という語感の違いはあるが、原語は同一と思われる。)

①「小さき人々」の系譜

沼野によれば、「アレクシエーヴィチ自身がよく用いる『小さな人間』とは、…単に『市井の人』、ふつうの人全般を漠然と指しているのだろうか。いや、そうではない。『ちっぽけな人間』とも訳せるこの人物像は、19世紀のロシア文学に連綿と連なる表象の系譜をなし、その末裔は、20世紀ロシア文学に時おり姿を現すこともある」(B-1: p 332)。

19世紀の系譜は、プーシキンの『駅長』から始まる。官位の最下位の「14等官である地方の宿駅の駅長サムソン・ヴィリン」は、最愛の娘が将校に騙され、さらわれたと思いこんだ。男に棄てられ惨めな生活を強いられているのではと不安になり、ペテルブルグに赴いた駅長が見たのは、将校に幸福そうに寄り添う娘の姿であった(B-4)。次はゴーゴリの『外套』である。筆耕(=書類の清書)を職とし、それに楽しみを見いだすだけの、見栄えのしない9等官アカーキー・バシマチキンは、厳寒に耐えるべく思い切って外套を新調した。彼は、自分のためと称して開かれたパーティーに気乗りしないながらも出席した帰り道、強盗に遭って外套を奪われる。人のアドバイスに従って、区警察署長さらに勅任

官に頼んだが埒が明かず、勅任官には罵倒までされた。ショックを受けたバシマチキン、病気になる死亡した(B-5)。系譜はさらにドストエフスキーの『貧しき人々』につながる。47歳の貧しい下級官吏マカール・ジェーヴシキンは、『外套』のアカーキーと同じく9等官で万年清書係である。近くに住む、自分の子どもと言っていいくらい年の離れた薄幸の娘ワルワラ・ドブロショロワを愛しており、わが身を削ってでもワルワラを援助することや彼女との往復書簡に生きがいを見いだしている。ところが、ワルワラはいわく付きの、裕福な男の求婚を悩みながらも受け入れ、マカールから去って行こうとする。それに対し、マカールは恨めしく思いつつ悲嘆にくれるしかないのである(B-3)。

「小さな人間」は、最初にこの言葉を文芸用語として使ったとされる「19世紀ロシアの著名な文芸評論家ヴィッサリオン・ベリンスキー」以降、「たいていの場合、下層階級の貧しく、だれの注意も惹かず、だれからも認められず、不当に虐げられ、社会の片隅でひっそり生きている人のことである」(B-1:p332)。なるほどと思えるが、ただ「下層階級」という言葉には注意したい。というのも、『貧しき人々』の訳者まえがきにあるように、「農奴制廃止時(1861年)のロシアは農民人口が8割以上で、そのほとんどは読み書きができなかった…。…こうした人たちと比べると、主人公の二人はいかに貧乏とは言え、正規の教育を受けることのできた階級の人たち」(B-3:p4)だからである。上記3冊の著作の主人公たちが貧しいのは事実としても、社会的に見れば、その下に経済的・文化的にもっと貧しい膨大な人口がいたのである。そして、例えば『貧しい人々』のマカールは、自分が貧しいにもかかわらず、同宿の自分よりも悲惨な家族に同情しているのである。

沼野自身の理解では、『『小さな人間』とは、抱えている問題こそさまざまだが、いずれも恵まれない境遇に身を置き、虐げられ、侮辱されているだけでなく、それまで持っていたもの、あるいは手にしたものを奪われたり失くしたりして大きな喪失感を味わっているという共通点がある…。アレクシエーヴィチが『小さな人』というときも、この喪失感のニュアンスを含んでいるのではないだろうか」(B-1:p333f)。確かに、上記の主人公たちは、愛する対象が人であるか物であるかの違いはあるが、大きな喪失感は共通している。この喪失感を定義に含めている点で、沼野の理解は優れているように思える。人口の大部分を占める広義の「下層階級」と「大きな喪失感」、この2点を筆者は「小さき人々」の特徴と見なしておきたい。

さて、「小さき人々」の厳密な定義はさておき、アレクシエーヴィチは「貧しく小さいとされてきた人々の心」を重視するのであるから、彼女をこの系譜上に位置づけることは決して間違いではないと思われる。

②アレクシエーヴィチにおける「小さき人々」と自由

たゞもし、アレクシエーヴィチの「小さき人々」を、たとえ広義であっても下層階級の人たちと同一視するなら、それは間違っているのではないか。例えば、アフガン戦争に関して、彼女は次のように記している。「若い人たちと話をすると、多くが志願してやってきたという。大部分が知識人家庭の出身だということに気がついた。教師、医師、司書。

ひと言で言えば、教養ある家庭ということ。みなアフガニスタンの人たちの社会主義建設を助けたいと心から願っている」(B-1: p 14)。決して下層階級とは思えない人たちであっても「戦争文化」に囚われていたのである。

アレクシエーヴィチは、自由を最も重要な価値と見なしている。そして、自由となるべき対象は、「戦争文化」「戦争の神話」に囚われているすべての人である。それに囚われているのは権力者も同じと言えるかもしれない。ただ、「亜鉛の少年たち」裁判で、原告のアフガン帰還兵に向かって「あなたは私ではなく、ソ連国防省と共産党政治局を裁判に引き出すべきよ」(B-1: p 131)と語るアレクシエーヴィチは、「戦争文化」の被害者と加害責任の大きな者を分けている。とすれば、一部のエリート(ソ連時代で言えば、共産党幹部、軍高官ら)を除くすべての人が「小さき人々」であると言うべきではないか。19世紀はいざ知らず、ソ連時代から今日まで続くポストソ連時代においては、「小さき人々」は、むしろ「ふつうの人全般」である、そう考えると、アレクシエーヴィチの無念さを伴う次の告白がよく理解できるのである。「私たち民主派が人々に語りかけた民主主義の理想は、彼らにとって大体において縁遠いものでした。…私たちが民衆像を手前勝手に作り上げていたのだ…。本当の民衆がどんなものであるか、私たちは知らずにいたのです。ペレストロイカ以後のこの30年間、私たちは理解できていませんでした。『あんな酷い仕打ちを受けて、なぜ民衆は黙っているのか』と。そこへ突如としてプーチンがやってきて、手垢にまみれたロシアの決まり文句『我々は偉大なロシアだ。我々は侮辱されている。さあ立ち上がろう』と言うのです。そして突然、民衆が語り始めました。86%のプーチン支持」(B-1: p 275f.)。

アレクシエーヴィチが「小さき人々」を愛しているのは間違いない。だからこそ、多くの人が彼女を信頼して、証言したのである。「小さき人々」は、「愛」を実践する、あるいは「人間らしさ」を発揮する。平等社会の理想を純粋に信じ、日常生活でもそのように実践した人がいた。憎むべきドイツ兵(捕虜)を治療したり、食料を与えたりした人たちがいた。憎むべきドイツの子どもたちに食料を与えた人がいた。兄弟国を助けたいと純粋に思ってアフガンに赴いた人たちがいた。チェルノブイリ原発の消火活動に当たり「重度の放射線症」になった夫に文字通り寄り添った妻がいた。終身刑を受けた見知らぬ男のそばで暮らすことを選んだ女性がいた。……しかし他方で「小さき人々」は、「戦争文化」に囚われてアレクシエーヴィチを非難したり、民主主義に関心を示さず、ただ物質的豊かさだけを望んだりする。アレクシエーヴィチは、この「小さき人々」の至らなさを理解した上で、なお彼らが成長し自由になることを願っているのである。

③「小さき人々」とポリフォニー

ドストエフスキーに従って、「この世に普遍的一般的な真理などというものは存在せず、人にはそれぞれ個別の真理しかない」と考えるアレクシエーヴィチにとって、どんな偉人英雄あるいは聖人が対象であろうと、ただ一人を理解することでは真理に到達できない。ノーベル賞受賞講演において彼女は、「いつも私が困るのは、真実というものがただひと

つの心臓、頭脳には収まりきらないということ、真実とは何かばらばらにたくさんあって多様で世界にばらまかれているということです」(B-1: p 8)と語っている。とすれば、真実に到達するには、たくさん声を集めるしかない。ここで言う真実は時代精神を意味している。アレクシエーヴィチは、「数百という証言から時代精神を紡ぎだす」(B-1: p 312)ことを試みているのである。

その際注意すべきは、たくさん声＝たくさん事実を集めれば自動的に真実が明らかになる、というわけではないことである。作家の側にまず「世界観」あるいは「哲学」が必要である。その「哲学」に基づいて事実を配置して作品を仕上げる。それは特定の意図をもって音を配置し作品を作る作曲家、特定の意図をもって糸を組み合わせ生地を織る人(機織り職人・織手)に似ている。アレクシエーヴィチ曰く、「私が本を書くときには、証言や資料を集めるだけではなく、私の眼を通した『世界観』や『哲学』を考える必要があります」(B-1: p 160)、「私のしていることは、オーラル・ヒストリーではなく、芸術、文学です。……私のは『声たちによる小説』とでもいったらいいでしょうか。作曲家は、いろいろな音から交響曲やオラトリオをつくりあげるでしょう、私もそういう作曲家のようなもので、たくさん声から長編をつくっているのです。そこにはそれぞれ登場人物がいて、それなりのプロットや流れがあるんです」(B-1: p 336f.)、『『声たちによる小説』…それは、たくさん話から生地を織りあげていくということです。ひとりひとりが自分なりに時代の片鱗を見ているのですから、それらを集めたらある光景が浮かびあがってきます」(B-1: p 337)。

ちなみに、「声」を引き出すには、日常会話が適している。なぜなら、「日常会話の言語は制約が少ないので、自由に流れでてきます。構文、イントネーション、アクセントのどれも飛んだり跳ねたり自由自在なので、感情も正確に反映されます。わたしは人々の感情を見守る、形なきものの歴史家なのです」(B-1: p 324)。リラックスした雰囲気を含意する日常会話からこそ「声」は引き出せるのであり、形式ばったインタビューでは無理なのである。「私は自分がしている仕事を『インタビュー』とは呼びたくありません。これは、暮らしについての会話です。友人のところに行くように話し相手の家を訪れます。何でも話します。新しいカーディガンのことも、愛のことも、戦争のことも。この会話にはどんな作り事もなければ、障壁もなく、ただおしゃべりするのです」(B-1: p 326f.)。

④ソルジェニーツィンについて

『収容所群島——1918-1956 文学的考察』の著者アレクサンドル・ソルジェニーツィンの対象と方法を、アレクシエーヴィチのそれを念頭におきつつ、紹介したい¹⁾。

まず共通点から。ソルジェニーツィンの対象も「小さき人々」と言える。逮捕され、家族や親しい人たち、日常生活から切り離された人の喪失感はどうほど大きいことか。ソル

1) 本来なら注に回すべき内容であるが、長文のため本文に記した。なお、引用に際して、太字部分は筆者の判断で普通の文字にした。

ジェニーツィンによれば、「私たちはそれぞれ互いに宇宙の中心であるが、『あなたは逮捕された！』と、しわがれ声で言われたとき、その宇宙は木端微塵に砕けてしまう」(C-2: p 17f.)のである。逮捕された人たちの多くは身に覚えがない。「間違いだとわかってきつと釈放される」と信じるが、釈放されない。というのも、「どの人間を逮捕し、どの人間には手を触れないかの選択の深い根拠が機関にない場合が往々にしてあったし、機関の目ざすところはもっぱら目標数字の達成だった」(C-2: p 28)からである。彼らは残虐な審理を経て、監獄へあるいは収容所へ送られ、過酷な環境で何年もしくは何十年と務め、あるいはその過程で亡くなる。まさに「小さき人々」である。

ソルジェニーツィンの方法もポリフォニーと言えるだろう。序に当たる部分で彼は、「私が自分の目と耳を働かせ、自分の皮膚と記憶に焼きつけて、《群島》から持ち出せるだけ持ち出したもののほかに、総計227人に及ぶ人びとが、その物語や回想や手紙の形で、この書物の資料となるものを、提供してくれた」と述べている。ソルジェニーツィンは、初監房の時から同囚との会話を実り多いものと感じていた。「時どき彼らが口にした驚くべき言葉」によって、「それまでは飛んだりはねたりしてもとても考え及ばなかった、自由でのびのびした思想が…生まれた」(C-2: p 267)からである。十月革命を讃美し、レーニンを讃美していた彼は、同囚との会話から多くを学び、実態を知り、真実に近づいていった。作品も彼の人生そのものもポリフォニックであった。

ロシア人における「抵抗の文化」の欠如を批判する点でも、両者は共通している。ソルジェニーツィンによれば、十月革命からまだ日の浅い時期に開かれたある集会で、反主流派が労働者の権利の重要性を説明した時、労働者たちは無関心であった。「ところが主流派の代表が立って労働者たちのだらしなさと怠惰を罵り、犠牲、時間外無償労働、食事制限、工場管理部に対する軍隊の服従を要求するや、…労働者たちの歓喜と拍手を呼び起こした…そういう私たちだったからこそ、その後のことはすべて起るべくして起ったのだ」(C-2: p 46f.)。ソルジェニーツィンは「…市民としての勇敢さ…。ほかならぬその勇敢さが！それこそが！ただそれこそが！私たちの社会にとって必要なのである！ただそれだけがわが国には欠けているのである…」(C-3: p 187)と叫んでいる。そして、死刑反対の持論に忠実であったため投獄されたある教授を例に挙げ、「みながみな彼のように市民的勇気をもった人びとだったら、この章も、この書物も書くことにはならなかったのではなからうか？」(C-2: p 81)と、市民的勇気（を發揮しての抵抗）の重要性を強調している。

相違点は、叙述のスタイルにあるとも言えるかもしれない。アレクシエーヴィチは、証言自体に語らせようとして、主体としての自分をできるだけ消そうと努めている。『収容所群島』においては、語り部としてのソルジェニーツィンが消えることはない。ただ、語りは単調とはほど遠く、「自伝、史実考証、ルポルタージュ、法令解釈、比較文学、随想、聞き書きなど」「さまざまなジャンルが描く対象によって使い分けられている」(訳者あとがき。C-3: p 416)。

4. アレクシエーヴィチの思想：自由・愛・小さき人々——まとめとその啓発性

①アレクシエーヴィチの思想のまとめ

以上をまとめると、まず、アレクシエーヴィチの「自由」は次のようなものである。第1に、「戦争文化」(もしくは「戦争の神話」)あるいは「イデオロギー」から自らを解放し、傍観することなく、自らを当事者として倫理的選択を行う。倫理的選択の際には愛が関わる。第2に、場合によっては国家に抵抗すること、それも単独での抵抗にとどまらず他の人と結びついて抵抗する「抵抗の文化」が必要である。この2つが満たされて初めて人は自由になる。そして第3に、制度としては自由民主主義が最善であり、それを機能させるために市民は自由にならなければならないのである。

アレクシエーヴィチの「愛」は、倫理的選択と強く関連している。しかし、完全にそれに包摂されるわけではない。人の命を慈しむ気持ちが人間の本性としてあり、そこから、敵味方に関係なく、亡くなった人や苦しんでいる人を哀れんだり助けたいと思う気持ちが生じる。愛は人間にだけ向けられるのではない。動物植物、生きとし生けるすべてのものが愛の対象となる。

自由になり、愛を実践することを期待されるのが「小さき人々」である。「小さき人々」には、国家意思の決定に関わる一部のエリートを除くすべての人が含まれる。性別で言えば、女性の方が男性より、自由になり愛を実践する可能性が高い。とは言え、イデオロギーの呪縛に囚われている人の中には女性もたくさん含まれる。アレクシエーヴィチの理想に到達するには、まだまだ長い道のりを歩き続けなければならないのである。さらに言えば、アレクシエーヴィチの関心が「小さき人々」にあるのは明白であるが、彼女の究極の理想は、一部のエリートも含むすべての人が、自由になり愛を実践することではないだろうか？分断を前提とした理想よりもその方が高次の理想であることは明らかである。そして愛を重視する彼女にとって、どんな悪人であっても罰を受けた後は赦されると考えるのが論理的に一貫しているように思えるからである。

②アレクシエーヴィチの思想の啓発性

アレクシエーヴィチに啓発・触発された筆者には今後の研究課題がいくつか浮かんだ。

- i. 自由概念の検討とアレクシエーヴィチの「自由」の位置づけ
- i-b. 自由と官僚制
- ii. 政治における倫理
- iii. 自由民主主義体制における市民に求められるもの——「小さき人々」と「市民」
- iv. フェミニズムの可能性——とりわけ戦争防止・停戦との関係において
- v. エコロジズムの可能性——とりわけ地球温暖化と原発について
- vi. 体制転換の困難さと自由民主主義化の諸条件

以下、時間と紙幅の許す範囲で、フェミニズムの可能性について検討してみたい。

5. フェミニズムと反戦平和の関係——佐藤文香『女性兵士という難問』（2022）を読む
 佐藤（2022）の参考文献一覧からその一端が伺われるように、戦争と平和に関する思想および実践としてのフェミニズムには既に膨大な蓄積がある。ここでは、佐藤（2022）を読んで私なりにまとめたそのポイントや課題を紹介するにとどめたい。

本書は、自衛隊や米軍における女性兵士の歴史や実態を紹介した第Ⅲ部・第Ⅳ部など、具体的で門外漢にもわかりやすい内容を含んでいるが、ここでは扱わない。理論的な部分に限定すると、本書において佐藤は、フェミニスト軍事社会学およびフェミニスト国際政治学/フェミニスト国際関係論の研究動向を概観した後、今後に向けて提言をしている。

①「軍事主義」「軍事化」「家父長制」とその批判

佐藤自身も大きな影響を受けている「フェミニスト国際政治学者のパイオニアであるシンシア・エンロー」（D-1：p 1）によれば、「軍事主義」「軍事化」「家父長制」という関連する諸概念は以下のように理解される。まず「軍事主義」*militarism* は「次のような想定、価値観、信念の束として捉え」られる。「①軍事力は緊張状態の究極的な解決策である。②人間は争うものである。③敵がいることが自然状態である。④ヒエラルキー的関係が効果的な行動を生み出す。⑤軍隊のない国家はナイーブで、十分近代的でなく、正当性を欠く。⑥危機の時に女性的な人びとは武力による保護を要する。⑦危機の時に武力的暴力行為に従事することを拒む男性は、男らしい男性としての地位を危うくする」（D-1：p 51）。「軍事化」*militarization* は、「何かが徐々に、制度として軍隊や軍事主義の基準に統制されたり、依拠したり、そこからその価値をひきだしたりするようになっていくプロセス」である。「この『何か』には、人はもちろんのこと、モノもアイディアも、ありとあらゆるものが入る」（D-1：p 54）。

ひと言で言えば、敵対的な国家間関係として国際関係を捉え、危機の時に女性など脆弱な人びとを守るべく、男性は階層的な軍隊に入って戦うべきとする思想が「軍事主義」であり、「軍事主義」が広がり、深まる過程が「軍事化」である。

ところで、この「弱く保護を要する女性」像と「強く暴力でもって弱者を守る男性」像は、自然なもの、決定されたものなのだろうか？ロバート・コンネルによれば、男性性は歴史的につくられたものであり、複数存在し、互いに競合しあっている。複数の男性性はヒエラルキーをなしており、ある男性性が「ジェンダー化された権力システムの中心」（D-1：p 38）に位置する（＝ヘゲモニックな男性性）。「軍事主義」におけるヘゲモニックな男性性は「軍事的男性性」と名づけられよう。「軍事的男性性」の内容として、サラ・ラディクが米軍の価値として例示している「ジェンダーにおける男性優位主義、権威への信頼、階層的命令、同性愛嫌悪」（D-3：p 472）などが挙げられよう。

エンローは「ある特定の男らしさ〔すなわち、軍事的男性性〕を、それ以外の男らしさとすべての女らしさに対して特権化することを『家父長制』とし」（D-1：p 58）ている。

「軍事的男性性」は、たとえある状況において支配的であっても、構築されたものにすぎないので、不安定さを免れることはできない。その不安定さは、とりわけ戦闘の最

前線で露わになる。ジョン・ホッキーによれば、「訓練では殺人と敵の始末法を学んでも、現実の作戦での歩兵の関心はむしろ生き残ることだ。だから英雄戦士の男性性が『もうたくさん』と拒否される」(D-1: p 40) ののである。ちなみに、デーヴ・グロスマンによれば、「多くの歴史的状況において、発砲しない兵士は火線部隊の大半を占めていた」(D-6: p 35) というから、多くの兵士は、自分も死にたくないし、敵も殺したくないのである。「軍事的男性性」はかくも不安定なものである。だからこそ、フランク・バレットの言うように、「[それを強固なものにすべく]、くり返したしかめられ示されなければならない」(D-1: p 43) ののである。

「軍事主義」「軍事化」の基底にある「男らしさ」「女らしさ」をめぐる、激しいせめぎ合いが続いているのが現状である、と言えよう。

②女性兵士の効果

i. 女性兵士誕生・増加の背景

実態においても一般のイメージにおいても、軍隊は圧倒的に男性によって占められているが、歴史の過程の中で女性兵士が誕生し、増加している。その背景として大きく2つ挙げられる。一つはジェンダー平等を求めるグローバルな流れである。もし軍隊が生計を立てる職場の一つとして考えられるなら、なぜ男性だけに限られなければならないのか、女性が進出してなぜ悪いのか？あるいは、「軍事任務を果たすことと『一級』市民であることとのあいだに深いつながりを持つ諸国においては、その任に就くことのできない女性が政治的な意思決定をなす立場に立つことが困難になる」(D-1: p 87f.) ので、政治的意思決定において男性と同等であろうとする女性は軍務に就くことを当然と考えるであろう。

もう一つは、軍隊に求められる任務の性格の変化である。佐藤によれば、「国民と国土を守る近代型の軍隊は、[冷戦の終結後] 今や人権の名のもとに『遠くの他者を救う』ことに駆り立てられて、ポストナショナルなものになってきている。平和維持や人道支援といった新たな任務に参加する兵士には戦闘とは別の能力が要請される。……国軍兵士に育まれる戦闘兵士の男性性は、抑制、文化的寛容、共感といった平和任務に期待される責任やふるまいとは調和しないのだ」(D-1: p 24)。すなわち、国連PKOに派遣された軍隊に典型的に見られる「ポストナショナル軍隊」には、敵の殲滅ではなく、「平和維持」(peace keeping) と「平和構築」(peace building) への貢献が期待される。その際、戦時性暴力を含む戦争の被害者たる女性や少女の思いに寄り添い、ニーズに応えるには同性たる女性の方が適しているのである。

ii. 女性兵士の効果

イ. ベティ・フリーダンの希望的観測

自由主義フェミニズムの代表的存在であり、全米女性連盟(NOW)の創設者であるベティ・フリーダンは、ウェストポイント陸軍士官学校の講師として招かれたさい、指揮官を含む女性兵士の増加を好意的に評価している。曰く、「女性たちが新しい軍の統率力と考えられる資質を持っていることは間違いない。彼女たちは厳しさに耐え抜く強さ、仕事

をやり通す力を持ち、人間の複雑さに対して敏感である。彼女たちは複雑で、変化し、予想しがたい現実に適応できる柔軟さを持っている——これは軍事的にも生存にとって必要なことであり、これまでの戦士のモデルを越えるものである」(D-2: p 227f.)、そして、「もし戦争が起りそうになれば、もちろん女性も徴兵されることだろう。そして、もし女性が戦闘やその指揮の必要に迫られたとしても、彼女たちは、決して男らしさの栄光のために殺すのではなく、人類のために役に立ち、価値あるものだという『モラルの問題』を十分考えた上でのことだろうと思うと、安心させられる」(D-2: p 229)と言う。

確かに、単に筋肉自慢で単純な思考しかできない男性指揮官や男性兵士よりはずっとよさそうに見える。殺戮は極めて深い道徳的判断を経て、やむにやまれぬケースにおいてのみなされるように思えるからだ。しかしながら、現実の戦争において政策決定者は常に「正義の戦争」を称する。とすれば、軍隊に女性が増加したとしても、それだけでは戦争抑止の効果は期待できないのではないか？

ロ. サラ・ラディクの主張

哲学者のサラ・ラディクの主張はもっと複雑である。彼女によれば、母親は全くの弱者である子どもと向き合う中で、平和的で従って兵士に期待される態度とは真逆の独特の態度を身につける。「保護する愛 [preservative love] はその安寧が危険にさらされている被造物をケアしたり宝物のように慈しむことである。……獲得よりも維持すること、違いを調停すること、脆弱な存在を保護すること、子どもの生に必要な最低限の調和と物質的条件を維持すること、が優先される」(D-3: p 479)。そんな平和的な女性を徴兵したら軍隊はどうなるだろうか？ラディクによれば、「そんな軍隊は最も必要で明らかに正義の戦闘しか戦わないだろう。それも人間的でできるだけ短時間しか戦わないだろう。そしてもっと破壊的な通常兵器あるいは核兵器にまでエスカレートする機会は増えないだろう。……かれらはある命令を非道徳的としてそれがもたらす害悪を不要とみなすことができるであろう。そして生き生きとした良心に従って行為する勇気をもてるであろう」(D-3: p 477)。

しかしラディクは、他方でこのような期待に自ら水を差している。曰く、「女性兵士の募集——まして女性の徴兵——を正当化するほど女性が軍隊を平和化する蓋然性が十分に高いとは私自身は信じていない」(D-3: p 485f.)、「私は徴兵が通常戦争を戦うのをより容易にすると信じている。私は徴兵とそれが可能とする戦争が核戦争の可能性を高めると信じている。……女性の平和性 [peacefulness] と戦闘に影響を与えるその可能性には明らかに限界がある。これらの限界は良識にとってはあまりに明白である…」(D-3: p 486)。

結局のところ、ラディクは女性兵士が直接軍隊という制度および戦闘を変容させる可能性には期待していない。軍隊がシヴィリアン・コントロールの下にある以上、政治を変える必要があるのである。「もし一国における平和主義が困難であるならば、ある戦場における平和主義は馬鹿げている。戦うことに幸せな兵士たちはためらいがちで思慮深い兵士たちを圧倒するだろう。…多くの兵士が傷つけるのをためらい戦闘を拒否しても、ハイテク兵器の性格によって決定される戦闘においてはほとんど違いをもたらさないだろう。

……市民政府がまだわれわれの軍隊を統制している。好戦的な男や女と同様に平和的な女性が参謀長、大統領、首相、国務長官、国防長官、そして企業の経営者にならない限り、ためらいがちな兵士や将軍たちが戦争政策を変化させることは起こりにくいだろう」(D-3: p 487)。ラディクは、「平和運動 [peace movements] に女性を補充することが、少なくとも女性の徴兵と同じくらい効果的かどうか、そして女性自身にとってより危険が少ないかどうか」自問し、そしてその答は明らかに「イエス」と考えている (D-3: p 488)。ラディクは、平和運動を通してより非暴力的な手段で紛争解決を図るよう政策決定者を変容させること (平和的な女性自身が政策決定者の地位に就くことも含めて) に期待をかけていると言えよう。

(ラディクの英文に慣れていない筆者は、ラディクが結局何を言いたいのか正直よくわかっていない。岡野八代の解説 (D-4) を読んでようやくラディクの真意を理解できたような気がする。)

③佐藤文香の提言

佐藤は本書の最後に「戦争・軍隊の批判的ジェンダー研究のために、3点の提言」(D-1: p 246) をしている。

第1に、「同じような問題意識と視点をもって研究する人びとが集う空間が不可欠だ」(D-1: p 247) と言う。少数派たる研究者にとって同志が増え、またそれを実感できることは勇気づけられるであろうから、理解できる提言である。

第2の提言は、ケアの倫理を超える必要性である。「ケアの倫理」とは、人間はお互いに他者からのケアを受けないと生きていけない極めて脆弱な存在であること、従って、ケアのニーズを知り、ケアを提供する必要があるが、一人ができるケアには限りがあるので、社会的な制度・政策が重要であること、グローバル化が進展する時代にあって相互依存関係は国境の内部にとどまらないこと等を前提とする、倫理的な思想と実践であると理解して大過ないだろう。その際決して忘れてならないことは、育児・家族の世話・介護といったケアが女性が担うべきものとして軽く見られてきたことを痛烈に批判するフェミニズムの流れに位置することである²⁾。

佐藤は、軍隊の性格がポストナショナルなものへと変容し、そこに女性兵士が増加している現実を「ケアの倫理」の取り込みとして、批判的に見ている。曰く、「軍隊がもはや、殺し、傷つけ、破壊するのではなく、救い、ケアし、建設するとされる今日、『ケアの倫理』は女性兵士を範としながら軍隊のなかに内部化されるのである。そして、この『ケアの倫理』が『遠くの他者』を守るという任務をはたすポストナショナルな軍隊のあり方を肯定する基盤になる時、女性兵士はジェンダーのおとりとなって、ジェンダー化された人道主義と新たな帝国主義への批判意識を後景化させていく。そうであるならば、わたしたちに必要なのは、ケアの倫理を超えた、もっと十分に批判的なオルタナティブの模索であ

2) ケアの倫理については、詳しくは岡野八代『ケアの倫理』(D-4-b) を参照のこと。

るだろう」(D-1: p 251)。

では、「もっと十分に批判的なオルタナティブ」とはどんなものか？それを模索するべく、佐藤は内藤千珠子『「アイドルの国」の性暴力』(D-5)に見える「恥辱の隠蔽」とボニー・マンの「主権的男性性」を参考にする。内藤の議論は筆者には難しすぎてうまく要約できないので、ここではボニー・マンの議論だけ紹介する。

フェミニスト哲学者のボニー・マンは、9.11テロに衝撃を受けた米国が対テロ戦争に突き進んでいった心理を次のように理解している。「暴力にさらされ、女のようにされることが男性にとって屈辱的な経験であるからこそ、彼（ら）はそれを何とかして埋めあわせようとする。辱められた経験は否認されなければならない、主権的男性性への渴望のもと、男性は、そして国家は、この恥を攻撃性へと転換することを迫られるのだ」(D-1: p 252)と。つまり、思わぬテロ攻撃で自国の脆弱性を思い知らされた米国人男性たちは、それを恥辱と捉えた。なぜなら、被傷性は女性性の特徴であり、攻撃を受けたということは自分たちが女のようにされたということと同義だからである。この屈辱を晴らすべく、男たちは対テロ戦争を仕掛けたというのである。佐藤は、この「恥辱の経験を」攻撃性に転化するのではなく、「オルタナティブの議論へと包含していくことが不可欠である」(D-1: p 252f.)と言う。つまり、非暴力的な手段でもって恥辱の経験に対するよう提言しているのである。

第3の提言は、『『取りこまれ』批判を超えたフェミニスト政治（学）を模索すること』(D-1: p 253)である。佐藤は「ケアの倫理」が取りこまれてしまった結果、「ジェンダー化された人道主義と新たな帝国主義への批判意識を後景化させていく」ことを批判している。ところが他方で、佐藤は、『これらはみな理論にすぎず、死体は積み重なっていく』…とするような『現実の世界』派の人びとから『批判理論』に向けられる糾弾に対しては、正直、たじろがずにはおられない」(D-1: p 254)と心中を吐露している。現実の問題点がある、かといってオルタナティブを明示できるわけではない、そんなじれったさに苦悶しつつも理想を求める、良心的な批判理論家の姿がそこには見える。

④結びに変えて——アレクシエーヴィチの女性論の位置づけ

以上、佐藤に依拠してフェミニスト軍事社会学やフェミニスト国際政治学/フェミニスト国際関係論の知見の一端を紹介してきた。最後に、アレクシエーヴィチの女性論がそこでどんな位置にあるのか簡単に考察して、拙論を締めくくりたい。

まず明白なのは、アレクシエーヴィチの「ユートピアの声」シリーズは、「ポストナショナルな軍隊」と女性兵士の意義については全く触れていないことである。大祖国戦争は祖国を守るという近代的な＝古いタイプの戦争である。アフガン戦争はアフガニスタンの特定の勢力を支援することを謳った戦争であり、派遣されたソ連兵たちは「ポストナショナルな軍隊」とは言えない。従って、ポストナショナルな状況の研究動向のなかにアレクシエーヴィチを位置づけることは、そもそも無理がある。

第2に、上に紹介したフェミニストのなかでは、サラ・ラディックの立場に近いように思

える。ラディクは、母親業の実践を通して女性は「保護する愛」を身につけること、そのような女性が戦地に赴けば戦闘が人間的なものに抑えられると一面では主張した。しかし他方で、戦闘の人間化の可能性・程度についてラディクは懐疑的であった。アレクシエーヴィチは、「産む性」としての女性が本質的に男性よりも平和的であると考えている。そしてそれは証言にあるように戦地における女性兵士の行動のなかに現われているのである。他方で、とは言え、兵士である以上女性兵士は内心どんなに嫌であっても敵を殺さなくてはならない。女性兵士の存在が戦闘を人間的なものにする程度・可能性についてはアレクシエーヴィチもラディクも懐疑的である。

さらに、アレクシエーヴィチは、女性の方が「戦争文化」から自由であるとして、女性たちの反戦・政治活動に注目し、期待している。それは、サラ・ラディクが非暴力的な政治の実現に向けて女性たちの平和運動に期待したことと重複している。

第3に、しかしながら、そもそもアレクシエーヴィチにおける女性性の強調とそれへの期待は、文字通りに受け取るべきではないのかもしれない。女性兵士の証言にあるように、男性兵士たちも、憎むべきドイツ兵捕虜に対して「ケアの倫理」を実践したりするのである。他方で、「戦争文化」に囚われて息子たちを戦地に送り込んだ母親たちもたくさん居たのである。二分法的なジェンダー理解が非現実的であるからこそ、アレクシエーヴィチはポリフォニーという方法にこだわっているのではないだろうか？

第4に、アレクシエーヴィチにとって本質的なことは、女性性への期待と言うよりも、男女を問わず、ソ連・ロシアのイデオロギーから自らを解放することである。アレクシエーヴィチは、男女を問わず個人個人にそれぞれの場で倫理的判断を下すことを要請する。「ケアの倫理」は、当初男性の「正義の倫理」と対照される女性的な倫理と誤解されることがあったが、決してそのようなものではなく、男女を問わず、習得可能なものだし、習得すべき倫理なのである。アレクシエーヴィチの「倫理的判断」と「ケアの倫理」は、戦地における敵との対処の仕方や、日常生活における子育てのあり方など、さまざまな場において倫理的な判断を下すこと——場合によっては極めて深刻な倫理的判断を下すこと——を個人個人に要請する。どんなに気が重くても、私たちはそこから目を背けてはならないのである。

<参考文献>

A. 「ユートピアの声」シリーズ

[原書の発行年については、訳者あとがき等に依拠した。訳者あとがきに不統一が見られる場合、筆者の責任で決定した。]

1. 三浦みどり訳『戦争は女の顔をしていない』(岩波現代文庫 2016) orig. 1984
(三浦みどりは、原書1984年版の邦訳を「次々に著者から送られてくる追加や書き換え」(訳者あとがき。A-1: p 488) に応じつつ完成させた。邦訳は2008年7月に群像社より刊行された。岩波現代文庫版は、この群像社版を底本としている。)
2. 三浦みどり訳『ボタン穴から見た戦争』(岩波現代文庫 2016) orig. 1985
(もともと、三浦みどりによる邦訳は群像社より2000年11月に刊行された。岩波現代文庫

版は、この群像社版を底本としている。)

3. 奈倉有里訳『亜鉛の少年たち』(岩波書店 2022) orig. 1991⇒増補・改訂版2013
(三浦みどり訳の『アフガン帰還兵の証言』は1991年版の『亜鉛の少年たち』を底本として、日本経済新聞社より1995年に出版された。原書が出版された後、アレクシエーヴィチは名誉棄損で提訴されたのだが、アレクシエーヴィチは、裁判の過程や関連する記事を含む増補・改訂版を出した。翻訳書は、その2016年版を底本としている。訳者が代わったのは、三浦みどりが2012年12月にガンで亡くなっていたからである。)
4. 松本妙子訳『完全版 チェルノブイリの祈り』(岩波書店 2021) orig. 1997⇒完全版2013
(アレクシエーヴィチから送られてきた「最終版」の原稿を基にした、1997年版の松本妙子による邦訳が、1998年、岩波書店から出版された。ところが「最終版」の後「10年近く、アレクシエーヴィチは書き続けていた」。本訳書は、その成果たる「完全版」の邦訳であり、2016年版を底本としている。)

5. 松本妙子訳『セカンドハンドの時代』(岩波書店 2016) orig. 2013

B. アレクシエーヴィチの思想

1. スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ、鎌倉英也、徐京植、沼野恭子著『アレクシエーヴィチとの対話』(岩波書店 2021)
2. ドストエフスキー著、亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』2 (光文社古典新訳文庫 2021) orig. 1880
3. ドストエフスキー著、安岡治子訳『貧しき人々』(光文社古典新訳文庫 2024) orig. 1846
4. プーシキン著、望月哲男訳『スペードのクイーン/バールキン物語』(光文社古典新訳文庫 2020) 所収『駅長』orig. 1831
5. ゴーゴリ著、浦雅春訳『鼻/外套/査察官』(光文社古典新訳文庫 2023) 所収『外套』orig. 1841

C. 関連書

1. アンナ・ポリトコフスカヤ著、三浦みどり訳『チェチェン やめられない戦争』(NHK 出版 2004) orig. 2002
2. アレクサンドル・ソルジェニーツィン著、木村浩訳『収容所群島』1 (新潮文庫 1975) orig. 1973
3. アレクサンドル・ソルジェニーツィン著、木村浩訳『収容所群島』2 (新潮文庫 1975) orig. 1973

D. 関連書②

1. 佐藤文香『女性兵士という難問』(慶應義塾大学出版会 2022)
2. ベティ・フリーダン著、下村満子訳『セカンド・ステージ』(集英社 1984) orig. 1981
3. Sara Ruddick, *Pacifying the Forces: Drafting Women in the Interests of Peace*, Signs, Journal of Women in Culture and Society, 8(3) (1983)
4. 岡野八代「批判的安全保障とケア」(『ジェンダー研究』第22号 2019) 所収。
- 4-b. 岡野八代『ケアの倫理』(岩波新書 2024)
5. 内藤千珠子『「アイドルの国」の性暴力』(増補版)(新曜社 2024) orig. 2021
6. デーヴ・グロスマン著、安原和見訳『戦争における「人殺し」の心理学』(ちくま学芸文庫 2008) orig. 1995